



井戸 啓介 (実験心理学)

私の音楽の楽しみ方

研究としては、大学の卒業論文の時から、人間の視覚認識の特性やメカニズムを扱っていますが、趣味の世界では「聴覚」というか「音楽を聴くこと」にずっとはまっています。そしてその結果、「教養ゼミ」の授業では「音楽」を題材にし、コミュニティラジオ局であるエフエムいみずさんとの協働で、学生諸君と音楽をネタにしたラジオ番組を作ったりもしています。

「音楽が好きで」と言うと、多くの方から「楽器を演奏するのですか？」と聞かれます。残念ながらこちらはダメで、もっぱら聴くばかり。その代わり、ジャンルを問わず、クラシックもロックもジャズもポップスも聴きます。そして、ヒットチャートや知名度は気にせず（というか、あえて無視して）、自分がいいと思ったものを見つけて喜んでいきます。

そうするとまたよく質問されるのは、「どうやってそのようなマイナーなものを見つけるのですか？」ということです。今の時代、サブスクリプションサービスが主流になっていますが、私はそちらもほとんど利用していませんし、映画やアニメとのタイアップにも関心がない。そうと言うと、余計に不思議に映るようです。

どう探しているのか、別に特別な技術を持っているわけではありません。お小遣いも少なく、ミュージシャンに関する情報も少なかった年齢のころからの習慣で、1枚レコードやCDを買ったとき、ジャケットやライナーノートを隅々まで読み、共同制作者やサポートとしてどのような方が参加しているのか、そういう情報を得るのがとても好きで、それを「次の選択」の手がかりにしているのです。思わぬミュージシャンが接点を持っていたのだという発見が多々あり、とても楽しいと思うのですが、意外にこのようなことをなさる方は少ない気もしています。ストリーミングで流れるにまかせて聴いているのでは、この楽しさには触れにくい。

ライブコンサートに行くと、ミュージシャンがグッズの購入を呼びかけることが増えてきていると感じます。サブスクの流れもあって、CDは売れなくなっています。そこでなのですが、収録曲や特典が微妙に異なるバージョンのCDを用意してどれも買わせるという戦略ではなく、セルフライナーノートや制作の内輪話的な情報をもっと書いてもらえないかと思うのであります。先日購入した（失礼ながら、決してセールス的に成功しているとは言えない）ミュージシャンのアルバムがちょうどそうで、いろいろと面白い情報が得られました。アートワークに凝るよりも費用もかからないでしょう。また、ネットに流すだけではその情報は簡単に消えてしまいます。

とまあ、情報価がないことを書いてきてしまいましたので、クラシック音楽と、ポップミュージックを題材としたおもしろい著作をご紹介しますとおこうと思います。

「現代音楽史—闘争しつづける芸術のゆくえ」、沼野雄司（著）、中公新書、2021年

「ロックの英詞を読む—世界を変える歌」、ピーター・バラカン（著）、集英社インターナショナル、2016年